



追悼

田端光美先生を偲ぶ 農村の生活調査と地域福祉

山田 知子
放送大学教養学部

田端光美先生を失うその日がいつか来ることはわかっていた。しかし、いざ訃報に接し激しく動揺している。名誉会員であり学会の支柱の一人であった田端先生のご業績を論じる力は浅学非才の私にはないが、学部以来の長いかかわりから見えてくる先生の研究人生の一端をご紹介します。追悼としたい。最初の出会いは日本女子大学社会福祉学科新入生オリエンテーション、先生は私のアドバイザーであった。2年のゼミでは、風早八十二の『日本社会政策史』を輪読し、社会科学の基本を学んだ。あれから幾星霜、先生との思い出を辿ることは、1970年代半ばから80年代、90年代の社会の変動、社会福祉基礎構造改革、地域福祉の主流化という社会福祉政策の転換とかさなる。

先生の研究の原点は農村の生活調査にある。先生は日本女子大学付属農家生活研究所¹の研究員を兼任し、地方の農家の生活調査、特に農家の女性たちを対象とした多くの現地調査に関わっていた。当時、「農民生活・福祉」という科目があり、後に「地域福祉」に変更されたのだが、先生は担当講師であった。エッセイ集『坂と海と』の「農村生活調査40年」（ドメス出版、2001年）で「…厳しい条件の中でフィールドワークの実際はもちろん、社会科学研究への視点を深め、さらに日本の農村・農民問題を勉強することができたのは、現在の地域福祉研究に少なからぬ礎石となっている」とお書きになっている。高度経済成長下の農村、農民の生活に注目することは、まさに地域変動にともなう住民の生活問題に着目することであり、それが地域福祉研究の出発点であることを我々は知る。

一連の生活調査は、最初の単著『日本の農村福祉』勁草書房（1982年）に結実する。高度経済成長下の農村の相対的窮乏と出稼ぎの問題をとりあげている。当時は経済成長で農村の消費水準が上昇し、都市の勤労世帯との格差は縮小した、といわれていたが、それに先生は異をとる。都市と農村の生計費から実質的格差を明らかにし、多くの農民が農外所得のために賃労働化し不安定就業が増大していると鋭く指摘した。農家の縁側で一人一人の農民のつぶやきのような語りから得た生活の実態、その詳細な生活分析から立ち上がってくる生活問題。社会の矛盾を可視化し、問うことこそが社会福祉研究の使命であることを私たちは改めて知らされる。「地域共生社会」の向こうで広がる格差と分断、家族と地域社会の空洞化の中で何をなすべきか。そこに住む人々の生活実像を丁寧に描き、積み重ねることからまず出発すべきなのではないだろうか。

刊行に向けて、私は戦前の農村社会事業の資料収集や原稿の整理をした。原稿をかかえ飯田橋の勁草書房に届けたことを昨日のように思い出す。自らの青春と重ね、忘れがたい日々である。40代の先生のお姿、いくつもの調査旅行の楽しい思い出は、今も私の中に生きている。これからも生き続けるだろう。万感の思いを込め、心から感謝の意をお伝えしたい。田端先生、長い間ご指導ありがとうございました。さようなら……。

ⁱ 日本女子大学附属農家生活研究所（1952年開設）は、児童研究所（1928年開設）、女子教育研究所（1964年開設）とともに1995年4月、日本女子大学総合研究所に改組・統合され現在に至る。